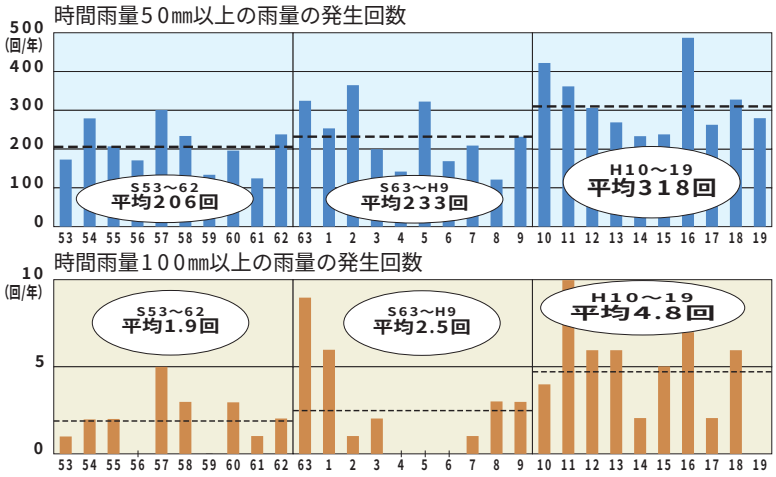
局地的な大雨（集中豪雨）の増加

近年、地球温暖化の影響とも言われる、限られた地域に短時間に多量の雨が降る「集中豪雨」が増加傾向にあります。平成20年は、台風の上陸はなかったものの、梅雨明け後の7月から8月にかけては暑い日が続いた一方で、日本各地で大気の状態が不安定となる日が多く、局地的・突発的な集中豪雨が頻発し、洪水や土砂災害が多く発生しました。

1時間に50㎜や100㎜を超す集中豪雨が増加



（国土交通省河川局資料）

平成20年7月29日読売新聞朝刊

2008年(平成20年)7月29日(火曜日)

府内大雨 浸水や停電

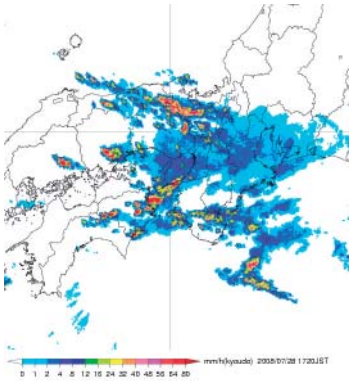
京丹後 宮津 2万4020人避難勧告

山科で落雷火災

（読売新聞社提供）

平成20年7月28日、神戸市の都賀（とが）川では上流で降った大雨による急な増水で、幼い命が失われる事故が発生しました。同じ日、京都府内でも京丹後市や長岡京市等で豪雨となり、河川のはん濫や生活道路の冠水がありました。京丹後市や宮津市では8,220世帯、24,000人に対して避難勧告が出されるなど、住民生活を直撃しました。

このような集中豪雨は、現在の気象予測技術では、どこで降り、どのくらいの雨量で、いつまで続くのかを予測するのは非常に難しいといわれています。



京丹後市で豪雨となったときの気象レーダーによる雨雲の様子。赤くなっているところが強い雨が降っている
（京都地方気象台提供）

「集中豪雨」という言葉はいつから？

集中豪雨という言葉が初めて使われたのは、1953年（昭和28年）8月15日の朝日新聞夕刊（大阪本社版）とされています。「集中豪雨木津川上流に」という見出しで、本文にも「激しい雷と豪雨を伴って木津川上流に」とあり、集中豪雨という表現が現象を的確に表していたため、次第に気象用語として定着するようになりました。

この大雨は、相楽郡・綴喜郡の山間部では総雨量428㎜、時間雨量100㎜にも達し、井手町では大正池が決壊、南山城村では土石流が発生するなどの大きな災害となり「南山城水害」と呼ばれています。

この時、京都市内では遠くで雷が聞こえる程度だったといわれており、ごく狭い地域への集中豪雨でした。

南山城水害（南山城地域）
死者・行方不明者336名／被害額151億円／相楽郡・綴喜郡の集中豪雨と大正池（井手町）の決壊、天井川のはん濫